金関丈夫「龍山寺の曹老人」論

――日本統治期台湾における探偵小説と台湾民俗保存活動――

辻　明寿

1. はじめに

第二次世界大戦の最中、日本とアメリカの戦いが激化する一九四三年、台湾において「曹老人の話」という探偵小説の連載が始まった。台湾本島人の街・艋舺（バンカ）の中心に建つ龍山寺を舞台に素人探偵・曹老人が活躍する「龍山寺の曹老人シリーズ」は終戦後も発表され続けられ、台湾で一九四七年までに単行本三冊が発刊されている。「龍山寺の曹老人シリーズ」著者の林熊生とは金関丈夫の筆名である。

金関丈夫（一八九七～一九八三）は香川県に生まれ、閑谷黌岡山分黌、県立松江中学校で学び、在学中より雑誌『白樺』『文章世界』を購読していた。一九一三年には福田豊らと共に同人雑誌『野人』を制作する等、文学活動をはじめており、学校では「軟文学の不良少年」と呼称されていたという。両親がメソジスト教会の信徒であったため幼児洗礼を受け、岡山組合教会の少年隊に入り、聖公会松江基督教会では按手礼を受けている。第三高等学校入学後はトルストイに傾倒し、一九一九年の朝鮮三一事件に際して、朝鮮出身の同舎生の憤慨に共感を覚えたという。一九二三年、京都帝国大学医学部卒業後、同大学解剖教室助手となり、清野賢次に師事し人類学を研究、同大学助教授に就任

する。一九三〇年、「琉球人の人類学的研究」で京都大学医学博士を取得、一九三三年には東亜考古学会の調査のため、満州及び朝鮮各地を廻り、一九三六年に台北医学専門学校助教授として台湾に赴任した。

一九三七年に台北帝国大学医学部解剖学教室第二講座教授となり、一九四一年に池田敏雄、国分直一、立石鉄臣等と共に『民俗台湾』を創刊、台湾の民俗研究を行っている。「龍山寺の曹老人シリーズ」の他、本格的探偵小説『船中の殺人』や随筆集を発表するなど、精力的に文学活動も行っていた。戦後は国立台湾大学教授として留用され、台南で二・二八事件の渦中に巻き込まれている。一九四九年に帰国し九州大学や鳥取大学、帝塚山大学等の教授を歴任した(1)。

金関丈夫「龍山寺の曹老人シリーズ」に関する先行研究では主に曹老人の人物造形に焦点が当てられ、曹老人の言説と金関丈夫の「人種意識」及び「大日本帝国にまつわる言説」との関わり等が考察されている。本稿では先行研究ではまだ触れられていない龍山寺という「場所」と「龍山寺の曹老人シリーズ」に描かれる宗教儀礼を考察し、金関丈夫が民俗研究ではなく、小説という「文芸」を通じて、何を描こうとしていたのかを考察する。

2．『龍山寺の曹老人』書誌情報および先行研究

「龍山寺の曹老人」シリーズの単行本は全三冊で、いずれも第二次世界大戦後の台湾で発行された。第一輯に収録されている作品の初出は『台湾公論』であると判明しているが、他の作品の初出は未だ判明していない。

① 林熊生『探偵小説集　龍山寺の曹老人・入船荘事件』（民国三四〈一九四五〉年一一月台北・東寧書局）

- 「許夫人の金環」（初出：昭和一八年八月一日『台湾公論』八月号「曹老人の話　第一話　信心深い泥棒のこと」、単行化にあ

たって改題）

- 「光と闇」（初出：昭和一八年一〇月一日『台湾公論』一〇月号「曹老人の話　第二話　光と闇」）
- 「入船荘事件」（初出：昭和一八年一二月一日『台湾公論』一二月号「慰問読物　曹老人の話　第三話　入船荘事件」）

② 林熊生『探偵小説集　龍山寺の曹老人・幽霊屋敷』（民国三四〈一九四五〉年一二月　台北・東寧書局）

- 「幽霊屋敷」初出不明。
- 「百貨店の曹老人」初出不明。

③ 第三輯の単行本（民国三六年〈一九四七〉一月台北・大同書局）

- 「謎の男」初出不明。
- 「観音利生記」初出不明。

第三輯は未発見だが、作品は法政大学出版局から出版された金関丈夫の『南の風――創作集』に収録されている(2)。

中島利郎は龍山寺の堂の片隅の椅子に腰をかけ、煙筒で煙草をのみながら、参詣人をぼんやりと眺めている曹老人が、龍山寺の堂の片隅の椅子に腰かけたままで、その観察力と推理をもって数々の難事件を解決していくという「龍山寺の曹老人」シリーズを金関丈夫が「曹老人」という「台湾版のシャーロック・ホームズを意図的に確立しようとした作品」(3)と指摘している。観察眼の鋭い曹老人は確かにシャーロック・ホームズ的であり、堂守の范さんはワトソン、陳警官はレストレード警部に対応していると言えるだろう。

また「龍山寺の曹老人」シリーズの登場人物のほとんどが台湾人であり、作者が林熊生という台湾人とまがう筆名を用いたのも、台湾人読者を意識したためであり、金関丈夫は台湾の読者、それは産業戦士をも含む読者に健全な娯楽を提供しようと考え、台湾人に身近な設定にして、台湾人読者にも探偵小説の面白さを知らせ、それを時局に対する『慰安』とした作品であると論じている(4)。太平洋戦争の最中である一九四三年に発表された第一輯収録の作品は、産業戦士や疲弊した労働者に一時的にでも作品世界を楽しんでもらい、いたわる意図があったというのは的確な指摘であろう。しかし、一九四七年という終戦後かなり時間が経ってから出版された第三輯は産業戦士や労働者への「慰安」という解釈だけではとらえきれない要素があると考えられる。

浦谷一弘は「龍山寺の曹老人シリーズ」の曹老人が「『個人主義的で〈道徳〉とは多少の距離を置いていたシャーロック・ホームズやヴァン・ダイン、明智小五郎とは違い、〈道徳〉的な探偵であり、観音様を表に出しながら、〈曹老人は〉はっきり大日本帝国／台湾総督府の手先としての説教を〈許夫人〉に対して行い、帝国主義と密接な、極めて直接的な説教』をする」(5)ことから、金関丈夫が「探偵小説の秩序回復の物語としての側面と、探偵小説の言語遊戯としての側面を巧みに利用し、まさに〈教育〉する探偵小説を書いた」(6)と指摘する。確かに第一輯に収録された作品においては帝国主義に即した説教をする曹老人であるが、浦谷一弘も「当初、帝国主義の文脈で〈教育〉していた曹老人がいつのまにか、〈台湾〉の〈漢民族〉の文脈で〈教育〉するように変わった」(7)と言及しているように、「観音利生記」は帝国主義とは異なる角度からの考察が必要であろう。

横路啓子は「曹老人が明らかに帝国よりの正義を振りかざす作品のいずれもが、第一輯に収録された作品であること、つまり初出が雑誌『台湾公論』」(8)であることに着目する。『台湾公論』は「『台湾が帝国南方の生命線たる重要性を認識し文化並に産業経済の進展と国防思想の普及徹底を期』すことを目的としていた、まさに時局に合った雑

誌」(9)であったため、曹老人が日本帝国の言説に寄り添った説教をするのは、「教育」的な意味合いであるというより、作者である金関丈夫が発表媒体である『台湾公論』のテイストを意識し、帝国の言説をさしはさんだと考えるべきであると論じている(10)。また横路は金関丈夫には「帝国に対する批判といったものではな」(11)く、「ただ単に戦争に対して協力的／非協力的といった、直線的なものではない。時局を利用しつつ、自らの知的欲望を満たしていこうとする、したたかでありながらも、どこか天真爛漫な態度が見い出せる」(12)。と考察している。横路啓子の指摘するように、金関丈夫は時局とは距離を置いた立場で、好奇心の向くまま研究を続けていたといえるが、雑誌『民俗台湾』での「文芸」に関する言説を鑑みると、単に知的欲望を満たすためだけだったと言い切ることはできないと考えられる。

河尻和也は雑誌『民俗台湾』と「龍山寺の曹老人シリーズ」の関連を考察している。『民俗台湾』は台湾の民俗や習慣等の紹介と研究を目的とした月刊誌であり、一九四一年七月号から一九四五年一月号まで計四三号が発行されている。『民俗台湾』の実質的な編集者は池田敏雄であったが、主宰者の名義は台北帝国大学教授の金関丈夫であった。日本統治期台湾において台北帝国大学土俗人種学研究室から移川子之蔵が中心となって、「高砂族」中心の研究誌『南方土俗』が出ていたのに対して、『民俗台湾』は台湾における漢民族の風俗や慣習の研究を中心としている(13)。河尻和也は「植民者の側に属する学者としての金関の旧慣に対する『保存・記録』といった冷徹な目――統治者としての被統治者へのオリエンタリズム、が存在していた」(14)と指摘する。確かに日本統治下の台湾で『台湾公論』に発表された作品については、「統治者・被統治者」という枠組みでとらえることは可能である。ただし金関丈夫が戦後、留用されていた時期に発刊された第三輯では金関丈夫の立場は「敗戦国の人間」となり、台湾本島人との立場は逆転していると言え、「龍山寺の曹老人シリーズ」全体を考えると「統治者・被統治者」という枠組みだけではとらえき

れない要素が残るであろう。河尻和也はさらに戦後初期における台湾の政治や社会的な不安を目の当たりにした金関丈夫が「戦後に発表した『龍山寺の曹老人』シリーズとは、読み物に飢えた読者への『娯楽』であった一方で、結果的にすでに『過去』となった日本統治時代へのノスタルジーを描いた作品であるとも言える」(15)と論じている。米軍機の爆撃によって灰燼に帰した龍山寺と空襲による延焼を防ぐために破壊された艋舺の街並みを描くことなく、昔日の龍山寺境内の賑わいを描いた「観音利生記」等の作品は、ノスタルジーととらえることも可能であろう。しかし、龍山寺において人々が行う宗教的な儀礼や、金関丈夫が境内の人々の信仰の有り様を見つめる眼差しはノスタルジーだけには還元できないのではないだろうか。

本稿は以上の先行研究とその問題点を踏まえ、第二次世界大戦の終戦前と終戦後にまたがって発表された「龍山寺の曹老人シリーズ」が、龍山寺という「場所」とそこで行われていた宗教的要素をどのように描いてきたのかを考察する。先行研究は主に曹老人の言説や金関丈夫の意図について考察したものであり、「龍山寺」という作品の舞台から考察したものはまだない。金関丈夫は小説を刊行する際、タイトルにあえて「龍山寺」という場所の名前を挿入しており、強いこだわりがあったと考えられる。さらに、金関丈夫が『民俗台湾』で言及していた「文芸」の役割も併せて考察することで「龍山寺の曹老人シリーズ」のテクストを考察していきたい。

3. 日本統治期の龍山寺について

一九三一年に発行された『台北市史』において、龍山寺は

艋舺龍山寺町に在り、約百九十余年前乾隆三年の開基建立に係る台北最初の巨刹で観音仏祖を祀り、最近台湾が生んだ彫刻家

黄土水氏の彫刻した釈迦尊像が配祀され、遠近から善男善女の日々に参拝夥しく、現在の廟宇は昭和三年十二月落慶式を挙げたもので、その結構荘厳木石彫刻の巧妙と華麗なのは人目を眩ずるばかり、実に台湾寺廟中の白眉として全島に冠絶して居る(16)

と紹介されており、日本統治時代においても台湾本島人の篤い信仰の場となっていたことが分かる。

清朝統治期に創建された龍山寺であるが、日本仏教界は領台直後から日本仏教布教の端緒として、龍山寺に注目していた。曹洞宗の僧侶である佐々木珍龍は台湾の在来寺院・寺廟の僧侶との接触を重ね、「台北の名刹艋舺龍山寺を布教拠点と定めて着手」(17)し、「曹洞宗は一八九五年一〇月に名刹艋舺龍山寺を実質的に末寺化して同時に台北布教の拠点を置いたのを手はじめに、各地の寺廟を次々に末寺化」(18)し「台北艋舺街龍山寺の住職も兼ね」(19)、「艋舺に国語学校を設立」(20)した。

一九一五年、台南庁噍吧哖（タバニー）の民間信仰の寺廟である西来庵を拠点に発生した漢民族最後の大規模な抗日武装蜂起事件が勃発し、台湾漢族の民間信仰に弾圧が加えられるようになると、曹洞宗は台湾土着僧俗と接近融和をすすめ、台北の龍山寺はその拠点とされる(21)。

一九三六年から台湾地方庁の主導で、各家庭の正庁に祀られていた中国式の先祖位牌や神仏像を撤去・焼却して神棚を安置する「正庁改善」運動がはじまり、一九三七年五月からは「寺廟整理」が議論され、台湾においても国家神道を強要する機運が高まってくる。寺廟整理運動では総督府により神社神道が強要され、キリスト教や仏教も排除の対象となり、「日本仏教各宗派は存続を願う寺廟関係者側の受け皿」(22)となった。そして「皇民化運動の推進下にあって、日本仏教各宗派は現地寺廟を次々に末寺化して傘下に収め、教育事業を通じて台湾民衆の皇民化に向けて邁進」(23)することとなったのである。一九三七年七月、「盧溝橋事件を契機に日中が全面戦争に突入すると、敵対関係に

ある中国の精神や伝統に依拠する旧慣宗教は激しい排除の対象」[24]となった。

金関丈夫が台湾で「龍山寺の曹老人シリーズ」を書き始めた時代はこのように、台湾の伝統的な宗教儀礼が弾圧され、「皇民化運動」によって日本文化や日本神道強制の機運が高まる状況下にあった。しかし、「龍山寺の曹老人シリーズ」のテクストには帝国の宗教政策に沿った言説や、日本仏教側の思惑、日本語教育に関することは描かれてはいない。先行研究が指摘するように、曹老人が帝国の言説に沿った言説をし、教育する意図があったならば、日本の皇民化運動に沿った日本仏教側の動向や教説がテクストに描かれていたであろう。しかし、「龍山寺の曹老人シリーズ」のテクストにはそのような日本仏教の影響や日本語教育施設のことが触れられている箇所は見られないのである。

当時の台湾仏教は仏教・儒教・道教が混淆し、渾然一体化したものだったが、龍山寺もその代表的な寺廟であり、道教的な要素が数多く見られる。一九四二年発行『台湾鉄道旅行案内』における「龍山寺」の項目では

> 本殿の中央には観音菩薩、両側には文殊、普賢の両菩薩、左右両側には四海龍王、十八羅漢、山神土地の神を、中央には媽祖、左右両屋には城隍爺、水仙尊王、後殿には文昌夫子、関帝、註生娘々等を安置し、信徒数万、香煙の絶えることがない。[25]

と紹介されている。「龍山寺の曹老人シリーズ」が描かれた時代にも龍山寺には媽祖、城隍爺を始めとする数多くの道教の神々が祀られており、龍山寺は道教色の濃い寺廟であったことが分かる。

台湾総督府は台湾の宗教の根底には道教が大きな勢力を持っており、道教の中心を成すものは現世利益であり、迷信的であると見なしていた[26]。さらには道教が反社会的な思想とも結びつきかねない危険な信仰とし、そうした危険性を未然に防ぐためには、日本仏教により善導して行く方策が有効であると考えていたのである[27]。

以下、「龍山寺の曹老人シリーズ」の「許夫人の金環」および「観音利生記」をあげて考察していくが、「龍山寺の曹老人シリーズ」は舞台が道教色の強い寺廟であるだけでなく、道教の儀式や風習も随所に描かれている。台湾総督府が道教を危険な信仰と見なしている中、なぜ金関丈夫は小説内に道教や台湾仏教に関するモチーフを描き込んだのであろうか。

4.「許夫人の金環」考察

艋舺の生き辞引とも言われる曹老人は龍山寺の堂守りである范さんとは長い間の友達であり、范さんがいないときには、「曹老人が、神籤(おみくじ)を卜(うら)なつたり、線香を売つたりする」[28]こともあった。曹老人は字も読めるし、籤詩の意味もわかり、時々迷信深い人々が自分や身内のものの病気の手当法を神籤のお告げで知りたいというとき、范さんの処方よりは、曹さんの処方の方がよくきくという。龍山寺の境内に許夫人が慌てた様子で参詣し、急いで用意した、「五牲の代りに簡単な供物を籃の中からとり出して仏前に供え、線香に火を点じて香炉にさし、やがて口の中で訴えごとをつぶやきながら、熱心に擲筊(ポアポエ)[29]をやり始め」る。許夫人は曹老人を堂守りだと勘違いし、神籤(おみくじ)の結果を聞きに来ると曹老人は許夫人の家に泥棒が入ったこと、盗まれた物の詳細や場所、盗みの手法まで言い当ててしまった。許夫人は曹老人が犯人であると決めつけ、警官を連れてくる。曹老人と旧知の陳警官が来ると、曹老人は真犯人がじきに龍山寺に現れるという。曹老人は

おくさん、いまは金を死蔵してはいけないときだのに、どうして政府に売らなかつたのだね？　若しあんたが、きつと売ると、観音様に誓約したら、わしは泥棒をつかまへて、金環をとり戻してあげやう。そして売つたお金で事変の公債を買ひなさ

い。さあそのことを観音様に誓ひなさい。(30)

と命令し、許夫人に公債を買うことを誓わせた。二人の婦人参詣人が来て、香爐で礼拝し、帰ろうとすると曹老人は湯飲みを投げて二人を捕まえるように警官に言う。この二人は女装した泥棒で、香爐のなかに許夫人から盗み出した金環を隠していたのだった。曹老人はこの二人の泥棒が昨夜、擲筊をして盗みが成功するかどうか声を出して占っているのを聞いていたため、二人が許夫人の家に盗みに入ったことを知っていたのだった。曹老人は泥棒が香爐の中に盗んだ金環を隠しているところも見ていたため、許夫人が警官を連れてくるのを待って、犯人を逮捕する計画を立てていたのだ。

浦谷一弘の先行研究が指摘するように、物語の中で、たしかに曹老人は許夫人に対して公債を買うように命令し、日本帝国の政策に沿った発言をしている。しかし台湾総督府が危険視していた道教的な要素を迷信であると批難し、排除する言説は見られない。作中で描かれる「神籤（おみくじ）」とは漢文で書かれた台湾民間宗教独自のものであるが、曹老人はその「神籤（おみくじ）」の結果を聞きに来る「迷信深い人々」の信仰を否定してはいない。また、道教の「擲筊」の場面でも、曹老人はその占いの行為を非難する言葉をかけることもないのである。

龍山寺は日本統治下の時代、日本の曹洞宗の影響が色濃く、日本語教育も行われていたが、その事例もテクストに描かれてはいない。もし、金関丈夫が帝国の政策に沿った小説を書くという意図があったならば、龍山寺や艋舺で日本仏教の布教や日本語教育に従事する日本人の動向も描いていたのではないだろうか。

ただ「許夫人の金環」のテクストにおける「擲筊」は曹老人が犯罪を発見し、解決するための鍵となっているのであって、「擲筊」という道教儀式に積極的な意義を認め、記録保存しようとしているとまでは言い切ることはできな

い。「許夫人の金環」は一九四一年という皇民化運動が推進されていた時期に発表されたため、当時戦火を交えていた中国に由来する道教の占いを記録保存すべきものとまでは踏み込めなかったのではないだろうか。次に取り上げる「観音利生記」は「龍山寺の曹老人シリーズ」最後の作品であり、一九四七年に単行本としてまとめられている。「観音利生記」を発表した時期は台湾総督府による検閲や圧力を懸念する必要がなかったと推察され、道教と龍山寺の観音信仰について、さらに詳しい描写が書き込まれている。

5.「観音利生記」考察

李氏銀は当時の漢民族の婚姻にまつわる慣習「媳婦仔（シンプア）」で、息子の嫁とするための養女・玉児を幼い頃から引き取り、息子の伯梁とともに育ててきた。しかし息子は病死し、銀は玉児に「お前が死ねばよかったのだ」とつらくあたるようになった。銀は玉児を娼妓として売る取引をしたが、それを知った玉児が榕樹で首を吊って自殺してしまう。銀がその知らせを聞いて駆けつけた時には、玉児の死体は消失しており、代わりに二行の謎句「観音境地尋美玉／龍山窟中遭神仙」と書き付けた紙が残されていた。銀が風水師の林秀煌に相談すると、

> こりゃこういうことだよ。銀はこれから龍山寺へゆきなさい。そして観音様にお伺いするのだ。美玉を尋ねよ、という字には玉児の名がはいっている。すると一人の神仙が現われて屍体のありかを教えてくれるだろう。その神仙の名もこの文句の中に出ている。その名は曹神仙というのだ。(31)

と言う。死体消失の真相は、自殺の現場に通り掛かった曹老人が玉児を助け、書き置きを残していたのだった。曹老人は相談にやってきた銀に、

これを御覧。このお告げには観音境地に美玉を尋ねよ、とあるじゃろ。先ず観音様にお尋ねしなければならんところを、お前はすぐ神仙を捜そうとする。それではほんとの神仙は出て来ないよ。

と娘への愛情の無さを叱り、観音様に対する信仰心の無さを諭すのである。李氏は悔悟の涙を流し、自身の非を認め、玉児の屍体が出て来たら、葬式を出して、丁寧に葬ることを約束する。さらに自分の息子が死んだのも、玉児が死んだのも、観音の罰であったと悔いるのである。李氏は改心し「曹神仙、どうぞ屍体を捜し出してください」(32)と曹老人に希う。曹老人は銀が改心したのを見届けて、防犯協力で得た賞金を玉児に持たせたうえ、仕事の世話もし、銀のもとに帰したのであった。

この作品では「許夫人の金環」において見られた道教的要素はより色濃くなり、登場人物には風水師がおり、曹老人が自ら「神仙」の役割を果たしている。河尻哲也が

「観音利生記」は『龍山寺の曹老人』の中でも最も遅い一九四七年一月に『龍山寺の曹老人　第三輯』中の一篇として発表された。ちなみに当作品が発表された翌月、台湾では二二八事件が発生している。当物語は、他の曹老人の物語と違い、所謂、探偵小説とは異なる形式・内容を持っている。(33)

と、指摘しているように、「観音利生記」というタイトルから見ても探偵小説というよりも説話的な物語ともとらえることができる。

「観音利生記」には「許夫人の金環」で見られた帝国の政策に沿った言説は全く見られない。また、「龍山寺の曹老人シリーズ」の他の作品には見られない龍山寺の境内や人々の様子を描いた語り手の主観が色濃い「地の文」が挿入

されている。その地の文ではまず龍山寺の情景が描写され、金関丈夫の美醜に関する価値判断が書かれている。

十二月から一月のはじめにかけての、台北の人の心をのびのびとさせるあの気持ちのいい日和が、今日も龍山寺の石階や廻廊の甃石に、眼に見えない陽炎を立たせている。押し詰った年の暮れの、遽しい世間の動きは門前の人足の繁さ、売薬うりの講釈の活気立った声、蜜柑売りの小僧の元気な叫びに、曹老人のいるあたりからもそれと察せられるが、境内にはさすが一種の静謐が漂っている。見るものから見ると、龍山寺の建物は俗悪醜態極まるものだというが、しかし俗中にも一の仙味がありとすれば、それはかの門外の雑踏を持ち込もうとしない民衆の敬虔な心のうちに、その根源があるのであろう。それに比べると、龍山寺は俗悪だなどと言いながら、帽子もとらずに、御本尊に写真機を向けようというような先生方こそ、俗中の俗だといわなくてはなるまい。(34)

なぜ、金関丈夫は「観音利生記」にのみ特別にこのように主観を交えた一節を書き入れたのであろうか。それは、一九四五年に停刊した雑誌『民俗台湾』で果たせなかった金関丈夫の台湾民衆の民俗を描くという目的を「龍山寺の曹老人シリーズ」が受け継いでいるからであると考えられる。

柳宗悦は『民俗台湾』で龍山寺について「船の中で先ず龍山寺をご覧なさい、台湾一です、と云ふ話を聴いた。ところが実際を見るとあんな酷いのはなゐね」(35)と否定的に言及しており、金関丈夫の龍山寺の境内を描写したテクストは柳宗悦のように短期間だけ台湾を訪れ、台湾人特有の美的価値観について深く考察することができなかった日本人の龍山寺に対する印象に対応していると考えられる。

龍山寺と日本仏教の関係で考察したように、当時の仏教寺院には日本の影響がかなり色濃く入り込んでいた。あえて金関丈夫が日本の影響を描かなかったのは、阿部純一郎が金関丈夫が推進していた台湾の「民藝保存活動」を例に

挙げて、

『民俗台湾』の台湾民藝保存活動は、伝統文化の「湮滅」に対抗して「保存」を主張するという単純なものではなく、いかなる形で保存すべきか、保存すべき文化とは何かという問題提起を含んだものであった。(36)

と指摘するように、金関丈夫は小説に用いる文化も取捨選択していて描いていたのだと考えられる。金関丈夫は『民俗台湾　第1号』で

滅びゆく一木一草は、政府や学者の手によって万全の保護策がとられてゐるが、それよりももつともつと大切な人間の気風の良さなどと云ふものが、自然の滅亡に任されてゐるのは、大変不合理な気がする。さて、せめてこれを文献にでも残さうとなると、これが気分の問題であるだけに、文芸以外にこれを伝へるものはないのかも知れない。(37)

と、学者の保護策からは漏れてしまうような人間の気風を保存するには「文芸」という形式を用いるべきだと考えていたことが分かる。台湾における寺廟の祭祀や行事は「台湾民衆の生活と一体化して、深く台湾民衆に根をおろしており、台湾民衆の生活リズムが寺廟を中心に展開される点で、『生活の宗教』ということができる」(38)と指摘されており、金関丈夫は学者としてではなく生活者として台湾民衆の生活を記すために金関丈夫は台湾本島人が数多く住む艋舺の龍山寺という寺廟を舞台に選んだと考えられる。そして、民藝という「物」を記録するだけではとらえられない「人々の気風」を文芸として残そうとしたのであろう。金関丈夫は「人々の気風」を保存する「文芸」の必要性をうったえたあと、

誰か芥川龍之介の「芋粥」の材料になつた、あの今昔物語の地方官のやうな、とてつもない大まかな裕かな気分を台湾の材料で描く文芸家は居ないだらうか。ヒステリーのやうな現代人には、実はもうわれわれは実生活で食傷してゐるのだ。(39)

と、芥川龍之介が『今昔物語集』を原案として描いたような作品を描く作者を熱望していた。

芥川龍之介は大正六年一月に「観音霊験譚を集成し、観音の衆生済度の諸相を記」(40)した『今昔物語集』の巻十六に収められている「貧女仕清水観音得助語第三十三」を元に短編小説「運」を書いている(41)。金関丈夫が芥川龍之介の「運」を読んでこの小説を意識していたかどうかは現時点では確証はないが、芥川龍之介の「運」に登場する翁は「幸福を、精神的、理想的なものとして、主体的な努力によって堅実に領有しようとする」(42)人物として描かれており、曹老人の価値観と共通点が見受けられる。金関丈夫は戦中・戦後の混乱期の台湾で「裕かな気分を台湾の材料で描く文芸家」がついにあらわれることがなかったため、自ら芥川龍之介が説話から主題を得たような手法で小説を描こうとしたのではないだろうか。

日本統治期の台湾においても、龍山寺でも観音菩薩の霊験が信じられており、龍山寺の公式サイトには

第2次世界大戦終戦直前の民国三四年（一九四五年）に米軍の空襲で本殿が焼夷弾の直撃を受け、石柱までもが全壊するひどい惨状でありましたが、このような状況のなかで、木像の本尊、観音菩薩像だけは、無傷のまま端然と蓮座に端座されご安泰でした。当時、空襲があると付近の住民は観音さまの膝下は絶対安全だと信じ、多数の人々が避難してきましたが、激しい空襲のなか、不思議なことに、避難者には全く死傷者がなく、そのあらたかな霊験は、今日でも人々の間で語り伝えられ、ご加護を讃えております。(43)

という観音霊験譚が紹介されている。また、当時台湾に暮らしていた竹中信子も「本島人の間に『寺廟は空襲にやられない』との迷信」(44)があったと証言している。観音信仰が盛んであった台湾において、数々の観音霊験譚が伝承されてきたであろう。金関丈夫はそのような観音霊験譚を物語に取り入れた可能性があるが、現時点では、どの観音霊験譚であるか特定することはできなかった。今後の課題として調査を続けていきたい。

6. おわりに

金関丈夫は第二次世界大戦中、学者および文学者として「大日本帝国」という枠組みの中で思考し、その枠組みに対する批判を主張していたわけではなかった。そのため先行研究が論ずるように「龍山寺の曹老人シリーズ」のテクストから「帝国の言説」やオリエンタリズム、エキゾチシズムを感じ取ることは可能であろう。しかし、戦前に描かれた「許夫人の金環」のテクストにおいても、雑誌『台湾公論』のテイストに従い、検閲を避けるために帝国の政策に沿った言説を取り入れながらも、総督府から危険視されていた台湾の民間宗教である道教の儀礼や習俗を書き記していた。

終戦後、日本帝国の統治が終わり、金関丈夫が中華民国に留用されていた一九四七年に発刊された「観音利生記」には総督府の検閲や圧力を考慮することなく、支配や被支配という枠組みからは離れた立場から、より台湾民間宗教である道教の影響が色濃く表れた物語が描かれている。

金関丈夫は『民俗台湾』で台湾民藝保存運動を行っていたが、政府や学者の保護政策から漏れてしまうような「人間の気風の良さ」を書き記すには文芸という形式以外にないと考えていた。金関丈夫はそのような文芸を描く作家の出現を切望していたが、現れないうちに『民俗台湾』は停刊し、台湾の街並みや風俗は戦禍によって大きく変わって

しまった。

金関丈夫がかつて『民俗台湾』で書き記そうとして、果たせなかった「人間の気風の良さ」を台湾民衆の生活と一体化して、深く台湾民衆に根をおろしていた「生活の宗教」の場である龍山寺を舞台とした文芸という形で残したのが「龍山寺の曹老人シリーズ」であったと考えられる。

＊全ての引用は、原則として新字に改め、ルビは省略した。

（本稿は、二〇一八年一一月に花園大学において行われた日本近代文学会・関西支部　秋季大会において行なった口頭発表を元に再考し論文としてまとめたものである。貴重なご意見および情報を寄せてくださった方々に深く謝意を表する。）

注

(1) 金関丈夫の経歴については中島利郎編（二〇〇五）『日本統治期台湾文学小事典』緑蔭書房　一二―一三頁　および、金関丈夫（二〇〇八）『お月さまいくつ（新装版）』法政大学出版社　三九九―四〇六頁に収録されている年表を参照した。

(2) 本稿における「龍山寺の曹老人シリーズ」のテクストは、「許夫人の金環」は林熊生（二〇〇一）『船中の殺人　龍山寺の曹老人　第一輯／第二輯』ゆまに書房、「観音利生記」は金関丈夫（一九八〇）『南の風　創作集』法政大学出版局を引用する。

(3) 中島利郎（二〇〇二）「日本統治期台湾探偵小説史稿」『日本統治期台湾文学集成９　台湾探偵小説集』緑陰書房　三八六頁

(4) 同註(3)　三九二頁

(5) 浦谷一弘（二〇〇四）「植民地統治期〈台湾〉の探偵小説――林熊生『龍山寺の曹老人』――」『花園大学国文学論究　32』花園大学国文学会　六九頁

(6) 同註(5)　七九頁

(7) 同註(5)　七一頁

(8) 横路啓子（二〇一五）「植民地台湾的探偵小説からの逸脱――金関丈夫『龍山寺の曹老人』シリーズを中心に」東アジアと同時代日本語文学フォーラム×高麗大学校　GLOBAL 日本研究院編『跨境　第2号』笠間書院　五二頁
(9) 同註(8)　五二頁
(10) 同註(8)　五三頁
(11) 同註(8)　五七頁
(12) 同註(8)　五八頁
(13) 「民俗台湾」中島利郎編（二〇〇五）『日本統治期台湾文学小事典』緑蔭書房　九八―九九頁
(14) 河尻和也（二〇一六）「都市、旧慣、犯罪『龍山寺の曹老人』シリーズ戦後の三作品を中心に」『台大日本語文研究』台湾大学日本語文学系　一八頁
(15) 同註(14)　二六頁
(16) 栗原純・鐘淑敏監修（一九三二）『近代台湾都市案内集成　第17巻　台北市史』台湾通信社　五六三頁
(17) 中西直樹（二〇一六）『龍谷叢書38　植民地台湾と日本仏教』三人社　四四頁
(18) 同註(17)　六六頁
(19) 同註(17)　四五頁
(20) 同註(17)　六七頁
(21) 同註(17)　二三一頁
(22) 同註(17)　二九〇頁
(23) 同註(17)　二九六頁
(24) 同註(17)　二六三頁
(25) 台湾総督府交通局鉄道部編纂（一九四二）『近代台湾都市案内集成　第6巻　台湾鉄道旅行案内　一九四二年』東亜旅行社台湾支部　六九頁
(26) 同註(17)　二二六頁
(27) 同註(17)　二二八頁

(28) 林熊生（一九四五）「許夫人の金環」『龍山寺の曹老人・第一輯』東寧書房　(5)頁
(29) 擲筊とは三日月状の道具を使用する道教の「ポエ占い」のことである。
(30) 同註(27)　一二頁
(31) 金関丈夫（一九八〇）「観音利生記」『南の風――創作集』法政大学出版局　二三三頁
(32) 同註(31)　二三七―二三八頁
(33) 同註(14)　一九頁
(34) 同註(31)　二三三―二三四頁
(35) 柳宗悦（一九四三）「『台湾』の民藝に就いて（下）」『民俗台湾　第24号（一九四三年・六月号）』一二頁
(36) 阿部純一郎（二〇一四）『〈移動〉と〈比較〉の日本帝国史　統治技術としての観光・博覧会・フィールドワーク』新曜社　二八四頁
(37) 金関丈夫（一九四一）「乱弾」『民俗台湾　第1号（一九四一年・七月号）』東都書籍　三二頁
(38) 同註(17)　一六頁
(39) 同註(37)　三二頁
(40) 馬淵和夫、稲垣泰一、国東文麿　校注・訳（二〇〇〇）『新編　日本古典文学全集36　今昔物語集②』小学館　一五〇頁
(41) 同註(40)　二七六頁
(42) 菊田茂男（一九七一）「芥川龍之介の歴史小説の方法（上）――『運』の成立を中心として――」『比較文学　14巻』日本比較文学会　二六頁
(43) 「竜山寺のご案内」『艋舺龍山寺』〔http://www.lungshan.org.tw/jp/index.php〕（最終閲覧日：二〇一九年一月二六日）
(44) 竹中信子（二〇〇一）『植民地台湾の日本女性生活史　昭和篇〔下〕』田畑書店　三二二頁

（つじ　あきとし・関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程）